講義は時間と体力と気力を使う大仕事

横尾政雄
農林学系教授

講義は大仕事

大学で若い学生に講義することがこんなに時間と体力と気力を使う仕事であったとは，２年前に筑波大学に来るまで全く思いもしなかった。今でもなお，講義の準備に悩み，講義の進行に汗をかくばかりである。

30数年間，農林水産省の研究職として農業技術開発に携わってきた。研究現場でも会議でもふつう技術者は共通の情報をもち対等な立場で論議していたから，筑波大学に移ることが決まっても，講義の具体的な姿がなかなかつかめなかった。この数十年の間の科学技術の進歩と情報の多様さを考え，講義は私がかつて受けたときとは違う形にしなければならないと分かってはいたが，大学に移って講義が迫るまでそのシナリオや資料の作成に手がつかなかった。

講義には定型がなく，また，他の講義資料は参考にならないと，多くの教官仲間から聞いた。作物生産学ほか，いくつかの専門科目と総合科目の部分を担当しなければならなかったが，それらの仕分けもできないまま，1999年４月を迎えた。

講義準備には時間がかかる

作物生産学や資源植物学は，科目の名称からすると，過去の古い学問領域と一般に想像されやすいが，これまでに蓄積された周辺分野の研究成果は多く，これらの科目から学ぶべき内容は，私が学生であったときとは比較にならないほど多岐にわたっている。また，成果を種々の分野から総合的に見たり考えたりする方法こそ，将来の食料生産や環境保全にとって必須なことといわれている。それにもかかわらず，この種の科目の参考書は一時代前の知識を羅列するばかりで，最新の研究成果に触れることが少なく，また，表現も平板なものが多い。

基礎的な事項を記載した初心者向け参

考書を解説するだけでも，与えられた時間数では足りそうもない。ましてや，それに加えて新しい情報を多角的に伝えたうえで，これから解決すべき問題も多いことを説明したい。そこで，学生には参考書を読むことを勧め，講義では新しい研究成果を多角的，有機的にみる手法を学ばせることを前提にして，講義のシナリオを立て資料を作ろうと考えた。ところが，これまで常識と思っていたことでも，若い学生に話すとなれば，それが真実か，どこに根拠があるかを確かめないと不安で仕方がなかった。そのため，資料の収集調査に多くの時間を費やしたが，講義の理想的な姿を描くまでにはほど至らず，実際にはシナリオも資料も不完全なままで，1年目の講義を始めたのであった。

初めの講義はシナリオどおりに進まなかった。講義が終わって学生の反応を思い出しては進め方を反省し，次の週の資料を急ぎ作り直した。翌週もまた同様なことを繰り返した。こうして，講義準備はとてつもなく手間のかかることをすべての担当科目で経験した。

1年目の講義を終え，学生に伝えるべき情報や考え方に合った資料構成や講義の進め方が分かりかけてきたので，シナリオと資料に手を加えて2年目に備えた。しかし，講義を進めるうちに，受講学生が変わると講義に対する反応も違うことに気づき，1年目と同様，毎週，講義シナリオを変え資料を作り直す羽目になった。2年目の講義も反省につぐ反省ばかりで終った。

参考書を読むようにと学生に指示してはいても，何割の学生がそのとおりにするかと心配するあまり，資料の中に基本的な事象を織りまぜるため，資料の量は膨らむ一方である。参考書にある基本的な情報やそこでは扱えない最新の情報，自分の研究経験に基づいた情報などを講義に盛り込むこと自体が，1単位や2単位の講義では無理なのかもしれない。この2年間というものは，土曜も日曜も休日も講義のことが頭から離れることがなかった。満足できる講義の姿が描けないまま，これからも何年も情報収集と資料作りを繰り返しそうである。

講義には体力・気力がいる

1時限で75分，2時限で150分という講義が実際にはどのくらいの仕事か，講義前には想像できなかった。それまでに経験した講演でも話題提供でもふつう30分以内であった。体力には自信があって立ちづくめでも緊張は維持できると思っていたものの，最初の150分の講義が終わっ

て居室に戻ったときは，これまでに経験したことがない疲労感をおぼえた。講義は体力と気力のいる仕事であることを実感するとともに，これを毎週続けなければならない怖さを感じた。講義と講義の間に会議がいくつか入ると，体力も気力も回復しないまま，次の週の講義に向かわざるを得ない有様であった。

講義では臨場感を高めるため実物かカラー写真を見せようとしているが，いいものが常に手元に揃わず適当に手もちの資料で済ますと，学生の反応の鈍いのが感じられる。また，1つのことをいろいろな角度から説明しても，学生にはそれを理解しているような表情がみえないときもある。そんなことが，講義中にも講義後にも私の気力を萎えさせる。

学生にしてみれば，「話題があちこちに飛びすぎる，脈絡がない，要点が絞られていない，結局，講義は散漫で主張がはっきりしない」などと不満をもっているのが，出席票の講義感想欄からみてとれる。「参考書を3回読むこと」を前提にして講義する私からすれば，学生の勉強不足，予習復習不足と私も不満をつのらせるがそれを口に出して言えない。参考書も見ず予習も復習もしない学生が大半といわれる現実では，私自身の講義の進め方にこそ問題があるのかと，いつも気弱になる。また，高校や大学で基本的な科目をとっていない学生にとっては，飛躍がありすぎるのかもしれない。学生が理解していないのではないかという不安がいつもつきまとっている。

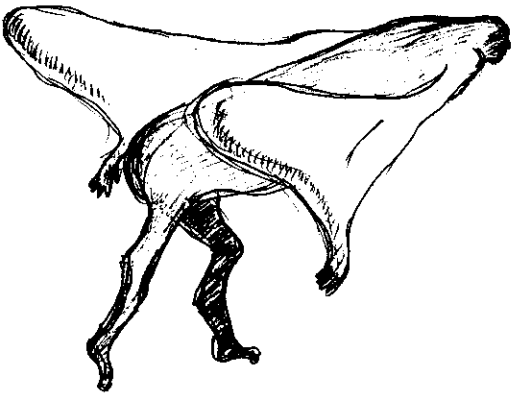
2年目を終え，150分の講義を立ちづくめでこなせる体力の按配はできるようになったが，気力の配分にはまだ慣れない。

講義のあとは反省ばかり

講義が終わるたびに，「これも話しておけばよかった，あれは分かってくれたか，こうすればよかった，あれは言いすぎた」などと反省するばかりで，気分のさえることがない。それでいて，すぐさま次の週の準備に入らざるを得ず，思うような講義の姿がなかなか決まらないまま，再び教壇に立ってやっと腹を据えることになる。講義では学生の表情を見ながら話の内容や速さを臨機に変えることが多く，結局，シナリオどおりに講義が進むことは一度もない。このような反省ばかりで2年間は過ぎた。

30数年前に私も，一般教養科目と専門科目にわたって多くの先生からいろいろな講義を受けた。ときには休講を喜び，眠気を我慢しながら講義を聞き，試験評価に抗議した経験がある。立場が変わって講義の投げ手になってみると，かつて

講義のひとこまにかけた先生方の苦労を身にしみて感じる。

講義に定型がなく，他の講義資料も参考にならないといった同僚のことばは正しいと実感しつつ，新しい情報と考え方を若い学生にどのように伝えればいいかに腐心している。講義は難しく，また，時間と体力と気力を必要とする大仕事である。

（よこおまさお　作物生産学）